

---

# EterNal ReMake

陽当 弾夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

E t e r N a l   R e M a k e

### 【Nコード】

N 6 6 4 9 Y

### 【作者名】

陽当 弾夢

### 【あらすじ】

人類は科学を極めた。

世界の現象で、科学で説明できないものはないといわれるまでに。

しかし学者達の思想はそこで止まらなかった。

太古より人々の思想に存在し続けたもの、『神』。

ある計画のために学者達は神を手に入れようとした。

そして研究の末、神を手に入れる方法を考案し、実行した。

しかしそれは許されない行為だった。

セフィロトで定められた『人間』の領域を侵そうとした人類は神の裁きを受ける。

神は地球に『使徒』を送り、人類を絶滅させようとする。

しかしただ黙っている人類ではなかった。

またしても禁忌を侵し、『天使』を人間に宿すことに成功した。その天使を宿した人間で使徒を駆逐しようと考えたのだ。

そして高校生、流原彼方はある少女と出会う。そしてその少女と共に使徒と天使の戦いを止めるため、戦場へと足を踏み入れる。

神、科学と天使、少年と少女の戦いの物語。

## #01 星空シューティングスター（前書き）

新作です！

とても楽しく書けました！皆様にも楽しさが伝われば幸いです。

感想、意見などありましたら気軽に書いてください！

## #01 星空シューティングスター

空は果てしなく澄み渡っている。陽は完全に沈み、夜の闇が全てを包んでいる

。少年、流原<sup>ナガレハラ</sup>彼方は一人大きな自然公園のベンチに座っていた。あたりには人影一つすらない。ちょうど丘の上のようなところに

設置されたベンチから眺める夜の星は平等に街にきらめきを振りまいていた。

こんなにも大都会なのに、ここまで星が見えるのはこの街くらいのもんだろう

。流原の住むこの街、東都<sup>トウト</sup>は世界に名をとどろかすほどの大都会だ。  
。この街は資源や石油などで発達したわけではなく、『技術』で発達した街だ

。従来では線路というものの上を走る『電車』というものがあつた。しかし天候や風によって電車が止まったり遅延したりと何かと不便だった。

それは世界どこでも同じ。そんな中、『磁気レール』を開発したのはこの国の

この街が初だ。磁力の反発により車体を浮かせ、今では寸分の狂いもなく電車

は街を往来し、台風がこようがレールは止まらない。  
また、昔は『ガソリン』という資源により自動車などが動いていた  
が、環境問

題と枯渇問題により廃止。今となつては全て電気モーターでやりく  
りされてい

る。  
リパースモーター  
熱還元電動により、発電時の熱をその場でそのまま

電気エネルギーに変換し、もはや冷却機を搭載しなくても電動モ  
ーターが使える

るようになった。もちろんこれも東都の技術だ。

こうして技術でこの街は進化してきた。全て学者の努力のたまもの  
だ。

そんな大都会の中でこうして美しい星を見られる。

これも環境問題に配慮した研究と緑化のおかげである。

流原は星の数を数えながらベンチに深くもたれ、夜空をあおいだ。

（ああ、帰りたくねえなあ）

特に意味は無い。

ただただやることなく、ただただこの公園に入ったらベンチに  
座りたくなっただけ。

明確な理由があるわけでもない意味の無い行動。

いつもそうだった。

平凡な毎日を、特に変化の無い毎日を作業のようになんの感情も抱  
かないですごし続ける。

学校は楽しいし楽しくない。友達面白いしつまらない。

そんな当たり前な。楽しい時もあれば楽しくない時もあるみたいな  
ありきたりと無感情の日々。

流原はふと遠くに見えるベンチを眺める。

そこには若い男女が座っていた。もう夜だからだろうか。

あきらかに二人の距離は近かった。どっからどうみてもカップルというやつだ

。

あと少しで夏休みにはいる。街には浮ついた空気が着実に広がって  
いつていた

。

残念ながらそのような浮ついた恋愛ごとに縁の無い流原は小さく舌  
打ちした。

（クソリア充どもめ・・・果てる！）

そう思いつつ、流原はカップルに向かって念を送るように手を変な  
ふうに動か

す。

自分だって今はこうだけどいつかは幸せになれる相手ができる。

未だにそんな儚い思いを抱きながらぐすつと鼻をすすった。

涙が出てきそうなのを堪える。

そんな流原の真上に流れ星がふる。漆黒の空に落書きをするように  
白い光はぐ

んぐんと進んでいく。

「あつ、流れ星……。恋人がほしい恋人がほしい恋人がほしい」

流れ星が降ったときに三回願い事を唱えると叶うと未だに信じている流原は  
迷いなく願った。

しかし流れ星は流原の言葉を無視するようにただただ進んでいった。  
地面へ。

流原には流れ星が綺麗な直線を描きながらこっちに落ちてくるように見えた。  
そして流れ星が自分の願いを叶えてくれるために舞い降りてきてくれるんだと

思った。そんなことを考える程度には流原は混乱していた。

もはやあれは流れ星じゃない。ただの隕石だ！

勢い良くベンチから飛び上がる。どんなに目を凝らしてもあの星は着実に地面との距離を縮めていつている。

綺麗な光の粒子を天からのプレゼントの様にばら撒きながら一人の少年の下へと堕ちていった。

「うわあああああああああ！？」

寺院の鐘の音のような爆音が公園を包んだ。



## #02 救済トラブルメーカー

・・・・・・・・ここはどこだ？何も見えない。いったい俺はどうしたんだ？

・・・・あぁ、そうか。隕石に衝突して死んだのか。

結局リア充にはなれず終いだっただな。今から自分の来世に期待するとして。

流原は立ち込める土煙の中、朦朧とした意識でそんなことを思っていた。

しだいに風が吹き、土煙が徐々に晴れていく。

「げほつげほげほ、うえ、口の中土入った。・・・・・・・・あれ。生きてる」

ゆっくりと起き上がり、あたりを見渡す。

目が点になる。とはまさに流原のためにあるような言葉だった。

自分のいた丘のような敷地が、巨大なスコップですくわれた様に一面土と岩に

なっていた。

ずっと遠くにいたカップルたちは怯えるようにして逃げている。

どうやら丘がまるごと消滅したようだった。

なんでこんなにも大規模な爆発なのに生きてるんだろう。

当たり前な疑問が流原の中で響く。

立ち上がって自分の周りを見る。

（少し急だけど、なんとか這いつくばっていけば降りられそうだな）  
とりあえずこの理解不能で危険な場所から立ち去ろうとしていた。

どういう理由で、どういう理屈で星が落ちてきて自分が巻き込まれたのかは知

らないが、とりあえず逃げる。このままじゃ確実に面倒くさいことになる。

いざ慎重に急斜面を降りようとした時、何かが足に当たる。バランスを崩し、そのままその物体の上に覆いかぶさるようにして倒れる。

しかしふにつという感触が流原を包んだ。

とても柔らかくて温かい。不思議な気持ちに包まれたまま、それを見つめる。

腰までありそうな長く、蒼みのある髪。桜色の唇と華奢な体。とても可愛らしい少女が全裸で倒れていた。全裸で。

「う、うわわ……。こここここれはっ！」

思わず流原は凝視してしまった。しかし慌てて目をそらす。

（これはまずい。確実にこの子に関わったら危ない。確かに恋人になりたいと

も言っただしこんな可愛い子いつでもウェルカムだけど空から落ちてくるって設

定はいらなかったな！）

なにか吹っ切れたように走りだす。早くこの場から去らなければ！その思いだけが巡っていた。

あの子には悪いけど、こっちも危ない目にはあいたくない。助けた

いのはやま

やまだけどこのシチュエーションは危ないって本能が叫んでるんだ！  
そんなことを必死に頭でぐるぐる考えながら急斜面を下りだした。

慎重に、それこそ誰にも見つからないようにして辺りを見渡した後、  
流原は玄関の鍵を開けた。こんなところを近所の人にも見られたら  
たまったもんじゃない。強くそう思いながら自宅である305号室  
に入る。

いつもならすんなり靴を脱いで部屋に入れるものの、今回はそう簡  
単には上が

れなかった。重さはそれほどではないが、大きさと目のやり場に困  
るものを運

び入れなければいけないのだ。

そう、流原はある少女を家に運んでいる。

別にその少女が可愛すぎて誘拐したとか道端で倒れてるところを  
下心丸出しで助けたとかそういう理由で連れてきたわけではない。  
しかしこの言い訳は他人には一切通用しないだろう。

それが分かっている流原は誰にも見られないように細心の注意を払  
って家の中

へ入った。

（結局、無理なんだよなあ。あんなのを見ないふりして帰るなんて  
全裸じゃ

警察にも届けられなかったしよ)

明後日から夏休みに入るのだから、気温は高く、高校生流原彼方は上着など

もつていなかった。流石に全裸の少女をそのままおぶって帰れるほど頭の狂っていない流原は自分のＴシャツを少女に着せ、自分は半裸になりなが

らも、人通りの少ない道を選んで走って連れてきた。

いくら女の子が好きといっても、半裸になってまで持って帰りたいほど

女の子が愛おしいのかと自己嫌悪にかられるまま半泣きになって帰宅したしだいである。

部屋に入り、Ｔシャツを着た少女を自分の使っているベッドにおろし、近くに

腰を下ろす。一人部屋のマンションに住んでいる流原にとって、一つ屋根の下の子と二人というのはなんとも興奮できるシチュエーションだ

。

(こ、これは、この子を好きにしても良いってことなのかな・・・。  
何もない

俺へ神様からのぶ、プレゼントなのかな)

初めての状況に混乱と動揺を隠せない流原は鼻血を出した。

「うわっ、やべー俺興奮しすぎだろ・・・どんだけ発情期なんだよ」

半ば呆れつつティッシュを取るために立ち上がる。

だが鼻血を出しているのに勢い良く立ち上がったせいで、立ちくらみを起こし

、ベッドに倒れた。

「う、うわっ」

ふにっという感覚が流原を包む。

実によくない状況だ。いくら不可抗力とはいえ、女の子に二回も覆いかぶさる

なんて。

自分の血が少女に垂れないようにそっと起き上がろうとする。

しかし蒼く透き通ったガラス細工のような綺麗な目が流原を逃がさなかった。

徐々に少女の瞳孔が開いていき、その綺麗な目をぐるりと一周させ、自分の置かれている状況を視覚だけで判断する。

そして判断した結果、大きく口を開き、頬を林檎よりも赤く染め、

「つつっきゃあああああああんぐうっ　・・・・・・・・」

「しーーーーっ!!」

すかさず流原の手が少女の口を押さえる。

ここで奇声を発せられては隠密に、慎重に運んだ苦労が水の泡だ。

「んっんぐう、んはあ。ん、んんんんん!!」

「ちよっと待ってちよっと待って!」

はたから見れば無理矢理少女を押し倒しているようにしか見えない。

うつすらとそんなことを思いながらそれでも手を離そうとはしなかった。

「少し落ち着いて！？話せば分かる！決して俺は少女を襲う変態なんかじゃな

いんだ！って痛い痛い！手を噛むな！」

「う、うるひゃい！こんな、こんなことまでして！鼻血まで出して！どこが変態じゃないっていうんですかあ！」

「違っ！確かに鼻血の元を辿れば君だけどこれは決してそういうんじゃないん

だ！」

「私を裸にまでしてまだ言い訳するんですかあ！！」

「イヤ、裸は本当に違うつて！それは最初から君が全裸だっただけで！

ほら、俺がちゃんとＴシャツを君に着させてあげたんだよ？」

「ほとんど見えてるじゃないですかああああああ！」

綺麗に弧を描いた少女の手のひらが流原の右頬にクリーンヒットする。

少年漫画さながら、血が飛び散る。鼻血の。

流原は這いつくばりながら逃げると、慌ててティッシュを鼻につめ、クローゼットから適当に衣類を少女に投げる。

「ちよつとりあえずそれ着て！そして落ち着いて！話はそれからだよ！！！」

頭を抱えるようにしてリビングから去り、キッチンに逃げ込む。といっても一人暮らし装備の部屋はもちろんそんなに広いわけな

く、  
少女の泣き声も、着替えの衣擦れの音も全て聞こえてしまった。  
その音色が流血量を増加させる。

「……大きい」

少女はポソリと呟く。高校二年生の男子の洋服が普通の女の子に合うはずがな

い。しかし少女が来たときのために少女用の洋服を用意するほど落ちてない流

原は、しかたないだろ。とティッシュで血を拭いながら答えた。

少女のか細「いいよ」の合図が入ったところで流原はリビングに戻る。

少女は小さなソファアにちょこんと座り、じとーっと流原を見つめている。

流原はこの少女のことを何一つ知らない。突然にそして偶然に流原の元に堕ち

てきて、下心もとい善意でここまで救出をした。

しかしこの子も非常識的な出会いをしたが、常識的に考えてやはり家族がいる

のだろう。ならばやはり明日にでも警察に行き、なんとか保護をしてもらう。

それが最善策だと流原は考えた。

しかしなにも知らないのでは警察に事情も説明できない。  
流原はソファの前に座り、少女をまっすぐに見上げる。

「さっきは悪かったよ。その、できれば君のことについて知りたいんだけど」

「謝ったのにまだ犯行は続けるんですか!??」

「ええっ犯行!? 違う違う、君の名前とか、住んでるところとか。明日にでも警察に連れてってあげたいからさ。最低限の事は教えてもらおうと」

思ってたさ」

誤解を解くのと説得をするのを平行作業した流原は、鼻血が止まったのを確認

して、鼻につめていたティッシュをゴミ箱に捨てた。

しかし少女は何も話さない。何も反応しない。いつのまにか真っ青になっていた

た顔は、沈むように頂垂れている。肩は小刻みに震え、血の気が引いていくの

が分かる。

「な・・・も」

震える唇が少しずつ言葉を紡ぐ。

「なに・・・も、」

ゆっくりと、ゆっくりと一呼吸一呼吸を意識しながら声を出す。



「なにも……覚えて……ないの」

今にも泣き出しそうなくらいの声音でありのままの事実を告げる。  
この表情と症状を見て、「冗談だろ」と笑い飛ばすことはできなかった。

流原は一瞬息がつまり、少女から目を離さなかった。

『なにも覚えてない』

記憶喪失になんてなったことのない流原にはまったく気持ちは分からない。

少女がここまで震えるのも分からない。

それでも、とても怖くて、とても受け入れられるようなものではないと。

流原ははつきりと理解した。

「そうか、」

言葉が出ない。なにもするべきかも分からない。

しかしこれでは警察に行っても意味がない。

記憶がないということは学校名や住所、名前さえも伝えることができないのだ

から、対処のしようがない。

なら今の自分にできることは。この子が泣かなくても大丈夫なようにするには。その最善の策は。

ただ黙って考えた。静寂が部屋を支配する。

その中で、流原は静かに頷いた。

（ふう、しゃあないな）

流原はゆっくりと立ち上がり、今にも泣き出しそうな少女に声をかける。

「じゃあ君の、君の記憶が取り戻せるまでここにいなよ。それぐらいだったら力になるから。何か思い出して、帰らなきゃいけない」

場所が分かるまでは、ずっとここにいるといいよ」

少女は目に涙を浮かべて流原を見る。

蒼いガラス細工のような綺麗な瞳が一心に見つめる。

何か声に出そうと口を動かすけれど、出てくるのは息だけ。ゆっくりと確かめるように唇を動かして、

「いや……。」

確かに断った。

「ええっ！」驚きを隠せない流原は少し後ずさる。

「だって、こんな変態さんのいるところで安全に、暮らせるわけないじゃないですか！」

「だから誤解だって!!」

まだそれを根に持ってるのかと少し呆れたが、少女の顔にはわずかながら笑顔が戻っている。

今まで縛り付けていた鎖が緩みだしたように。

「それでも、どうしても一緒にいてほしいって頼むのなら、いくら変態さんの頼みとはいえ、無下に断るのは可愛そうなので、住むですよ。」

確かに少女は笑っていた。いつしか少女に纏わり付いていた鎖は解け、

瞳に光が戻っている。

流原も少し笑うと、「じゃあ、一緒にいたいのでよろしく頼むよ」と、少女に願った。

「しょうがないですね」

笑う少女の煌きは、いつしかの流れ星の光の粒子に似ていた。

## 形の無い贈り物（前書き）

時間がかかってすみません！  
第3話です！

## 形の無い贈り物

「いいいいやあだ！」

「いやだじゃねえ！大人しくしてろ！」

七月19日、天気晴れ。

結局昨日のゴタゴタから一睡もできなかった流原彼方ナガレハラカナタは少女にどなりつけていた。

流石に少女を匿っておくなんて言ってもいつかはバレてしまうので、流原は何かとお世話になっている大家さんに少女のことを話そうと、朝早くからマンションの地下に向かっていた。

ここのマンションはとても小さく、三階までしかない。

なんでも高くすると、「日当たりが悪い」と周りから苦情が来るため、

地上ではなく、地下に部屋を多く設けている。

地上三階、つまり最上階に住む流原は、最下層に住む大家さんのところに

少女を無理矢理引っ張って連れて行く道中だった。

全て男物の衣類を身につけている少女は、流原のベッドを独占使用しておいて

まだ寝足りないという流原に喧嘩を売る一言を発したため、夕方に挨拶に行く予定だったのに早朝無理矢理エスカレーターに乗せられているのだった。

「こんな朝早くから何しに行くんですかっ」

「お前について挨拶しに行くんだよ!」

「誰にですか?」

「大家さんについてもう10回以上言っただぞ?」

一睡もしていない流原はフラフラになりながらも質問に答えた。

「何で挨拶なんかするんですか?」

そんな流原の気も知らず少女は畳み掛けるように質問を浴びせる。それに対しての回答もすでに10回以上言っていた流原は無視しようとして試みたが、しつこく質問してくるので小さくため息をついた後

「だからお前のためだつて。それじゃ何だ、お前外出したらどうやって部屋に戻るんだ?ここは指紋認証式ロックだからちゃんと登録しないと一人じゃ絶対入れないぞ?」

それとも部屋から一歩も出ないのか?どっちにしろこのセキユリティと

廊下の監視カメラで大家さんにはバレるんだから。最初から挨拶しとくんだよ。」

ちなみに流原は誤解も解くために向かっているということもあった。廊下に設置してある監視カメラに少なからず昨日のTシャツ一枚の女の子を背負って歩く変態男の姿が映っているだろうから、その点の説明もちゃんとしておきたかった。

地下25階の最下層フロアに着くと、廊下の一番向こうに扉が一つだけ見える。

ここ25階は大家さん一人で使っている。

流原が一人暮らしを始めてから隣人の次にお世話になっている人だ。

扉の横にある指紋認証のパネルを指で触れながら話す。

「早朝にすいませーん、305号室の流原ですけど、大家さん起きてますか？」

ちなみに無理矢理腕を掴んで連れてきた少女は流原の腕にかぶりつきながら

必死に帰宅を訴える。

痛いっていつてんだろおお！流原がかぶりつく少女の顔を両手で押さえて

ほっぺをぐにーつと引っ張っていると、ガチャと扉が開いた。

「朝から元気だねえ彼方、その可愛い女の子はどっから拾ってきたんだい？」

背が高く、髪は黒でポニーテール。見た目年齢は20代後半に見える女性が扉の前に立っていた。

右手には缶ビール、左手にはスルメイカ。

おっさん装備にしか見えないこの女性が流原の住むマンションの大家、  
ヨコヅカアユミ  
横塚歩だ。

「ははっ、おはようございます。歩さんも朝からその、元気ですね・・・」

右手に持つ缶ビールを見つめながら言う。

横塚は、はははと笑うと二人を自分の部屋へ招き入れた。

流石1フロア全て使っているだけあって部屋の広さは異常だった。リビングは汚いからとてもじゃないが招待できないとの事なので、流原達は使っていない空き部屋へ案内された。

その部屋まで辿り付くのに時間もかかるくらいの広さを持つこのフロアで

よく迷子にならないな。と僅かな疑問が流原にはあった。

隣で腕を思いつきりつねっている少女は前を歩く横塚を睨みつけながら

歩いていく。だから痛いって！とまたしても流原は少女に怒る。

案内された空き部屋はベッドが一つあるだけのこじんまりとした部屋だ。

どかつと横塚が地べたに座ると、続いて流原と少女も座る。

（ほんとに動作がおっさんだよな）

酒をぐいつと呑み、流原の方を向く。

「んで？話つてのは？やっぱりその可愛い子ちゃんについてかい？」

「ああ、……まあ。」

流原は話もしようにもどうやって説明しようか戸惑いながら、昨日の出来事を横塚に説明した。

「へえ……」

最初は疑いの目しか流原に向けていなかった。

女の子を拉致<sup>バグ</sup>ってきた言い訳だろ？と。

しかし横塚が記憶がないことを本人に確認すると、少し驚きながらも小さく何度も頷いた。

「なるほどね。昨日の監視カメラの映像見て彼方の両親に連絡つけ



ようかとも

思っただけどそういうことだったのねー」

とニヤけながら流原に昨日の時点で少女を連れてきていたのはバレていたんだよと告げる。

流原は自分の機転と采配に感動しながらここに来て良かったと心から思った。

流原の父親は旅客機のパイロットで、母親は添乗員。

常に世界各国を飛び回り、一緒に住んでいた時もめったに帰ってこなかった。

そこで母親の知り合いである横塚の所へ一人暮らしをさせたというものだ。

もともとは横塚のフロアの部屋を一つ借りて、横塚と住む予定だったのが、

両親がめったに帰ってこないせいで身に付いた一人暮らしのスキルがあるため、今では地上の部屋を借りて一人暮らしさせてもらっている。

年頃の男の子だから。とすぐに納得してくれた横塚に、流原は感謝の気持ちを抱いている。部屋代も母親のコネで割引されていて、両親の仕送りで生活している状態だ。

横塚は自分の持っていた缶ビールが空になったのを確認すると、手をポンツと

叩き、「それならその子に名前を私がつけてあげよう!」  
と元気いっぱいに宣言した。

どうして急にそんなこと。流原はよく分からなかった。

その思いを察したのか横塚はパチツつと流原にウィンクをする。

流原の知っている限り、横塚は確かに唐突に物事を提案するタイプの人だが、

それは毎回核心をついた適切な行動だったりするときが多い。

母は横塚のアドバイスを何度も助けられたと言っていたような気がする。

しかし何故名前をつけるのか。それが今この少女にとって最善の選択なのか。

何も知らない。

その恐怖が流原には分からない。少女に比べればあまりにも幸せな環境にすぎず。

自分がどこから来たのか、どこで生まれたのか、何をしていたのか、自分の親は。

自分の家は。……自分の名前は。

しかし何故名前をつけるのか。それが今この少女にとって最善の選択なのか。

流原が隣を見ると少女は期待と不安を思わせる微妙な表情になっていた。

形の無いものを受け取る。

しかし少女がこれから貰うものはとても大切なもので。

切っても切れない糸のようなもので。

これから貰うものの大切さは記憶の無いこの子が理解するには難しいだろうけど。

「空から……ね。名前は……」

何かブツブツと言ったあと、横塚はバツつと顔を上げ、少女の方を向いた。

「君は今から『空音莉奈』だ！空音っていうのは空の落としもの。『落ちる』って漢字は可愛くないからアレンジして、空の音しもの。『音』って漢字にしてみた。『莉奈』ってのは私の娘ができたらつけようと思ってた縁起の良い名前だ！意味はあるっちゃあるが説明するのは面倒くさいなあ。しかしいい名だぞ」

と、近くにあった紙にボールペンで少女の名前を書いて見せる。

「そらね・・・りな」

少女は一字一字確かめるように呟くと、顔を輝かせて「ありがとうございます！」とお礼をした。

たったこれだけのことで満面の笑みを少女は浮かべていた。

流原は自分にできないこと、あんなに少女の笑顔を見るだけでも苦勞したのに

この一瞬で、と素直に尊敬していた。

気に入ってもらえたのが嬉しいらしく、横塚の顔にも笑顔が生まれる。

それから指紋認証など、一通りの住所登録をして横塚家を後にする。行きとは違って意気揚々な少女を眺めながら、流原達は自分の部屋に戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6649y/>

---

EterNal ReMake

2012年1月14日16時48分発行